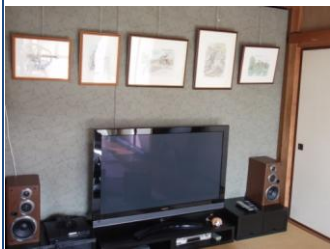


# 第17回アトリエ訪問

# 松野光純 湯河原町在住

幕山公園の梅日より、松野さんの家の前のしだれ梅の様子でわかるらしい。まだつばみの梅に迎えられた玄関には、女性の顔と風景画が掛っていた。どちらも力強い作品だ。恩師兎月人(石井玲一)氏の作品だった。お茶のご用意をして下さりながら「今一人暮らしなのですよ。」とおっしゃった。最愛の奥様を46歳の若さで亡くされていた事を初めて知った。男手ひとつで二人のお子様を独立させ、その後もご両親の介護をされるなど、夫として父として子として最後まで礼をつくして今がある事を知り、松野さんの人としての強さ大きさを改めて感じるのだった。日当たりのよいアトリエには50インチの大きなテレビ。よほどの映画好きなのだと拝察した。しかしこれは松野さんの大事な絵のツールなのだと伺った。現場でスケッチをした後、仕上げは家で描く事も多い。そんな時は写真を



この大画面面取りで、細部まで正確かめながら仕上げるのが松野流だと作画の秘

秘密も公開して下さい。

「平成16年」正に松野さん第2の人生はここから始まった。松野さんは長年務めた市役所を定年退職後、再就職はせず、新たな人生をひたすら歩き続けていられた。現在湯河原美術協会会長、きらめき☆おだわら塾市民教授、旺玄会会友、そして現在160名の会員を持つ「スケッチングウォークの会」の主宰を務めている。その合間に西相展や湯河原美術協会展にも出品し、全国のウォーキング大会には今も個人で参加しているのだという。伺っただけでも実に多忙なスケジュールである。さらに市民教授として教えるにあたり自分に課した課題は、美術大学で夢ひ直すことだった。若い頃に出来なかった夢の実現でもあった武蔵野美術大学造形学部油絵学科(通信制)に入学し、絵画を学び直したという。通信制とはいっても全て昼間の学生と共に学ぶ環境、若い学生に交じっての講義はさぞ充実した時間だったはずだ。新幹線通学で通い切った武蔵美は、平成20年4年で卒業した。

そんな合間をぬって昨年新九郎で発表された「東海道五十三次展」は大変評判の展覧会

となった。5年の歳月をかけて日本橋から京都三条大橋までを歩き描いて来られたのだという。壮観だった。「スケッチングウォーク」の大先輩と「歌川広重」の事を紹介されたが、まさに松野さんの画号「画歩人」と重なった。180年の時空を超えた宿場は、全く姿を変えてしまっているところも多かったようだが、まだ面影の残っている所もあり、友人と3人のぶつづけ本番の旅の思い出話を語る様子は羨ましいほど楽しげだった。これらは全て、平成16年から始めたものばかりだ。初の公募展旺玄会への出品は、4回連続で入選され、平成20年会友に推挙されている。

現役時代は生涯学習と教育委員会畑を歩いて来られた。今では全国から参加のある「城下町小田原ツーデーマーチ」は、現役時代松野さんが立ち上げた企画だ。その準備には3年を要したという。日本ウォーキング協会に所属し全国のイベントに参加しながら、コースの選定も行ったのだという。ウォーキングの中でも印象に残るコースがいくつかある。天城峠までバスで行き伊豆の踊子の足跡をたどるコースや房総の花畑を歩くツアーは、特に印象に残っているという。しかし、どんなに素晴らしいコースも皆一目散に歩くだけ。素晴らしい景色の中を歩きながら「もったいないなあ」といつも思っていたという。スケッチをされる松野さんならではの感性と視点だが、後の「スケッチングウォークの会」につながっていく。ウォーキングタウン小田原散策マップには、歴史や自然豊かな小田原を歩くコースが多数紹介されているが、その表紙も松野さんのスケッチが飾っている。

主宰を務める『スケッチングウォークの会』は、現在小田原に3教室、湯河原に2教室、参加者160名と言う大所帯の会になっている。元々は、松野さんが指導される「きらめき☆おだわら塾」での4回コースの卒業生が、卒業後も継続したいと自然発生的にグループが出来たのだという。スケッチが好きで歩くのが好きな人が参加しているが、小学校以来初めて筆を持ったという人が3、4割を占めるという気軽さも人気の理由だろう。「アトリエは青空の下 師は自然」明快なコンセプトは松野さんのコピーだ。月に1回、下見をして選定した近隣のコースを40名で移動するのだという。午前1時間歩き1時間描く。1時間の昼休みもまた楽しい交流の時間だ。そして午後、また1時間歩き1時間描くという1日5時間の内容だ。参加者は7割が



女性、60代70代が中心だが80代の健脚の方も多数参加している

という。自然を楽しみながら歩き、絵を描く。参加者は月に1度の会に参加するために、各自健康管理をされ、会員の中には大病をする方がいられないことに驚くと言われる。また40名での移動にもかかわらず、保険の適用や事故が一度もないというのも素晴らしい実績だ。十分な事前の下見や安全の配慮には細やかな気配りと経験が生きているのだろう。只、人気講座になり過ぎて、今では定員を減らすなどして長く楽しむための手だても工夫していると申し訳なさそうに話された。

160名の会員の作品は、年に一度発表会で展示される。普段は活動日が異なる会員たちが、相互の作品を見合う事の出来る唯一の場だ。歩くのが好きで参加している人も絵が好きで歩き始めた人も、展覧会に向けての思いには素晴らしいものがあるのだという。その効果は作品にも表れるようだ。展覧会をやることで技量が確実に伸びるのだそう。互いに吸収し合い、向上し合う。素晴らしい生涯学習の理想が見えた気がする。3月の展覧会を前に、会は今熱気に包まれているらしい。会員のエネルギーに圧倒されながら、指導にも力が入ると顔がほころんだ。

日当たりのよい廊下には、懐かしい足踏みミシンがおかれていた。業務用の高性能のものだ。21年連れ添った奥様が長年仕事で使っていたものなのだそう。「捨てられないんですよ。」とこやかに話す松野さんは、このアトリエで今も奥様と共に新たな人生をゆっくりと歩んでいられた。団塊世代が還暦を迎え、自分の人生を振り返る時を得る。健康で自然を愛し生涯現役で人生を楽しむ事程豊かで幸せな事はない。日焼けされスリムな体形を維持している松野さんから沢山のエネルギーを頂き、「明日から散歩をしようかな」と背中を押された気持でアトリエを後にした。

(新九郎友の会 木下和子)

**2月のこと** ASHIGARA アートフェスティバルの2月18日トークセッション「アート×自然」に参加した。会場は築100年以上の古民家を改装した宿力(YADORIKI)、パントマイマーのIKUO 三橋さんのゲストハウスである。プロデューサー小川巧記さんと三橋さんの「寄に創った意味、これからのビジョン」等のトークセッションで始まった。続いて“視点を変える”をキーワードにしたワークショップで全員屋外へ。講師は川島直さん(インタープリター)。四角いミラーを鼻の下に当て、空を写しながら歩く。軒先や木の枝等がさかさまに目に映る。すごく新鮮で見える。梅や蜜柑のなる林に到着。次の遊びは枝や木の節等に顔を見つけ、白い丸シールにマジックで目玉を描き、貼るといふもの。「見てみて」「これいいね」などと言いながら見つける。次は葉っぱじゃんけん。それぞれ一番しわくちやの、きれいな、長い、小さい葉っぱを一枚ずつ集める。二人一組で背中合わせになり、「一番長い葉っぱ、葉っぱじゃんけん!」の掛け声で振り向きながら出し、勝ったほうがもらえる。4回相手を変えて行い、一番沢山残った人が勝ち。次は講師いわく魔法の紙(只の画用紙・はがき大)を木や草の後ろに置き、シルエットを写す。抒情的な感じ、抽象的なもの様々なシルエットが浮かぶ。傑作と思ったら公式カメラマンを呼び写してもらおう。皆さん寒さを忘れて遊びました。川島さんは自然観察のガイドを長年やっていたが、知識中心のガイドに行き詰まりを感じ、「気づき」や自分との「つながり」を発見していく、アートのアプローチのワークショップに切り替えたという。アートイベントに似合う企画だと思う。

工場まるごとプロジェクトにも徐々に人が集まりはじめています。工場の雰囲気が残るギャラリーが好評である。ソウセイカフェは木を素材にしたテーブル、イスに薪ストーブの雰囲気が良く、いも煮、お汁粉、七輪で焼くお餅、ひでひこロールケーキ、コーヒー等が楽しめ、お客様の滞留時間が長い。アートをはじめよもやま話に花が咲く。25日は小田原シネマトピアの協力による映画会に21名。26日は南足柄出身のゴメンズスマンズによるライブに52人も人が集まった。地元開成南小学校の校歌作詞作曲を手掛け、生徒さんもいるなかで校歌は2度の熱唱になり大いに盛り上がった。この日は開成町長も来場され、瀬戸屋敷のひな祭りそっちのけで、ほぼ一日びるぼっくり・ソウセイカフェで皆さんと交流されていました。「みんなでアート 元気に足柄」のコピーのもと5つの創発市民プログラムが展開されています。詳しくはASHIGARAアート~のHPで。

